

# ヘンリー・アダムズの『デモクラシー』： ある十九世紀アメリカ女性の物語

米 山 美 穂

## 1. はじめに

『デモクラシー』は、ヘンリー・アダムズが1880年に出版した政治風刺小説である<sup>1)</sup>。ワシントンの政治腐敗を赤裸々に描き、公然と揶揄したこの小説は、当時センセーショナルな成功を収めた。著者の希望で匿名で出版されたことが読者の好奇心をさらに掻き立て、アメリカのみならずイギリスの社交界でも大きな話題を呼んだのである。

『デモクラシー』は一つのモデル小説であった。小説に登場する人物のそれぞれにモデルとなった実在の人物がいた。ワシントンの事情通なら、アダムズが手がかりとして与えてくれる人物の特徴を分析すれば、背後に隠された人物を探り当てることも可能であった<sup>2)</sup>。内部事情に詳しい者にとっては格好のゲームである。さらに、読者は、登場人物だけでなく、著者の割り出しにも夢中になった。自分の素性を明らかにできない著者に、読者が、密かな悪意と策略を想像するのは当然である。小説の内容が内容であるだけに、素性がわかってしまったときの著者の狼狽と困惑ぶりを想像すれば、それは、実に意地の悪い喜びを提供してくれる愉快的な作業であった<sup>3)</sup>。そして、また、政治小説に漂う秘密と嘲笑の臭いは、政治に直接関わりのない読者の好奇心をも十分に刺激した。Roman à clefの謎解きに躍起になりながら、アメリカの読者は、自国の政治的実験の失敗を宣言するような内容に憤慨し、また、アメリカの大胆な実験を快く思っていないイギリスの読者は、大喜びしたのである。

今まで『デモクラシー』に試みられた解釈は、文字どおりに、政治小説と

しての性格を強調したものが多かった。著者の意図を探り、その政治的立場や思想を明らかにすることに主眼が置かれてきた<sup>4)</sup>。だが、アダムズのこの小説には、無視できないもう一つの特徴があった。彼は、主人公に女性を起用したのである<sup>5)</sup>。

彼は、ワシントンの大物政治家の腐敗を読者に訴える媒介として、理想主義的な政治観を持った一女性を選んだ。その結果、彼の小説は、二通りの筋の展開を見せることになったのであった。第一の筋は、政治家ラトクリフの腐敗を摘発し、彼を追いつめていくことによって展開する。そして、裏の筋ともいえる第二の筋では、彼を追いつめていく過程において主人公マデリン・リーが経験する内面の変化が詳細にたどられていく。アダムズの小説は、ラトクリフの悪と主人公の善を対比することによって彼の道徳的墮落を糾弾する単なる善悪二元論では終わらないのである。彼は、二人の善悪の關係に、マデリンの潜在的な権力への欲求を介入させて、善であるはずの彼女をラトクリフの悪へと近づけていく。彼女は、権力のために、ラトクリフの虚偽の積極的な同志となる危機を体験するのである。

本論は、マデリンを中心に据えた第二の筋の展開を考察する。マデリンを単なる道徳の化身ではなく、欲望に悩み苦しむ一人の人間として描いたアダムズは、彼女の姿に、十九世紀のアメリカ社会を生きる女性のあり方を問うたのであった。

## 2. 女性の主人公とアダムズの意図

アダムズが『デモクラシー』の主人公に女性を選んだのは、女性の方が、ワシントンの政治腐敗を告発する媒介として適当であったからである<sup>6)</sup>。まず、自分が著者であることを秘密にしておきたい彼は、主人公を女性にすることによって、作者が女性である可能性を作り出すことができた。十九世紀は、女性作家による女性を主人公にした小説が、出版界を大いに賑わしている時代であった。彼は、女性にとって大量生産されていた文学的価値の低い作品と自分の作品が同列に見られることは、飽くまで拒否したにちがいない

が、作者が女性である可能性を作り出すことは、有効なカモフラージュになった。また、政治家の道徳的な墮落を告発するには、十九世紀に一般的な事実として受け入れられていた女性の道徳の高さと対比するのが、単純でかつ説得力のある方法と考えられた。教養ある美しい女性の高邁で理想主義的な政治観と目標のためには手段を選ばないきわめて現実的で下劣な政治家の態度の比較は、審美的な観点からもわかりやすい。さらに、彼は、悪徳政治家の求婚を女主人公に拒絶させ、彼を辱める筋立てを考えていた。また、社会的地位も高い、魅力ある女性であれば、出世欲が渦巻き、猜疑心と警戒心の強いワシントンの社会に、面倒臭い前提なしに簡単に溶け込むことができた。筋の進行上必要な政界の情報も、相手の警戒心の弱まる女性であれば、打ち明け話などを通して容易に収集することができるのである。

このように、確かに、女性の主人公はアダムズの目的に理想的であった。だが、独身の女性を政治の町ワシントンに送り込むためには、乗り越えなければならない困難もあったのである。まず何よりも、女性と政治という組み合わせが特殊であった。十九世紀のアメリカ社会は、女性の領分を家庭に限定した。政治は男性の領分に属し、女性の関わるものではなかったのである。どれほど優れた資質を持った女性であっても、男性に属する政治に興味を持ち、それに関わるために家庭を離れたなら、女性としての価値を社会的に失ってしまう。アダムズの小説が彼を社会的に葬り去ることを目的とするならば、彼が受ける社会的制裁の実際の執行人となる女性を社会的な失格者として描くわけにはいかないのである。さらに、彼女の家庭性を否定することによって彼女の女性性<sup>7)</sup>に疑問が差し挟まれれば、政治家を告発するために必要な彼女の道徳性を損なうことにもなりかねなかった。彼は、小説のプロットを守り、読者の歓心を買うためにも、家庭人としての彼女を損なうことなく、彼女をワシントンに赴かせる正当な動機を見つけなければならなかった。

アダムズは、主人公に未亡人という免罪符を与えることによって、この困難を乗り越えたかに見えた。家族を失い悲しみに暮れる未亡人であれば、家

庭にとどまる必要はない。むしろ、家庭という女性の決定的なアイデンティティーの抛り所を失った絶望に対する同情から、多少の逸脱行為は大目に見られるはずであった。彼女は、社会的な制裁を受ける心配もなく、政治腐敗を映し出す鏡となるべく、自由にワシントンへ赴くことができるのである。未亡人であれば、政治家との恋愛も自由であった。

だが、アダムズは、未亡人という免罪符で辛うじて救った彼女の女性性を、結局危険にさらすことになるのである。彼にとって重要だったのは、主人公のマデリンが、ワシントン見物に出かける程度の無害な興味ではなく、政治権力に対してもっと積極的で男性的な欲望を、たとえ潜在的であるにせよ、抱くことであった。アダムズは、政治腐敗を摘発するだけではなく、さらに、彼自身の政治権力に対する心の葛藤を昇華する媒介の役割を彼女に課していたのである。彼は、彼女に、彼の身代わりとして、単なる嫌悪ではなく、もっと根源的な絶望を、政治権力に対して感じて欲しかった。そのために、彼女は、女性の領域を囲む境界線を越え、破滅の危険を冒すくらいの真剣さを持って政治に関わり、権力の不毛性を自ら体験しなければならないのである。

彼にとって、政治権力とは、自己の理想の社会的実現を押し進める手段であると同時に、目的達成のための必要悪として、道徳的墮落を誘惑する、両刃の剣であった。彼は、政治の建設的な側面を肯定はするものの、自己の理想と道徳律を裏切る否定的な側面をどうしても忘れることができない。政治は、曾祖父のジョン・アダムズ以来、アダムズ家の男性が天職として奉じてきたものであった。伝統を重じるアダムズ家の男子として育てられた彼にとって、政治は自然に人生の一部になっていた。だが、その一方、彼は、高い理想を掲げていてもそれが必ずしも通用するわけではない政治の現実をいやというほど知ってしまった。曾祖父も、祖父も、父も、理想と現実の相容れないことを知りつつ理想に固執したために、激しい失望を味わっていたのであった。だからこそ彼は、繰り返された歴史を再び自分が繰り返すことを拒否し、政治家としてではなく、第三者としての政治を批判する立場を選ん

だ。だが、彼の決意は、政治の持つ魅力の前で揺らいでしまうのである。アダムズは、主人公の権力に対する道徳的な絶望によって、その不毛性をもう一度自分に納得させたかったのであった。

主人公の女性を政治権力に近づけたのは、政治権力の不道徳性を社会に知らしめ、自分を納得させるために、やむを得ない選択であった。だが、アダムズは、彼女の女性性をそうして危うくすることによって逆に、女性性の真性を再確認したのである。アダムズ家の優秀な女性達に囲まれて女性観を育んできた彼は、女性性が女性の本質であることを信じていた<sup>8)</sup>。そして、女性性が彼の信ずる通りであるならば、彼がそれを変えようとする試みもすべて無駄なのである。女性性と女性の一体化は完璧であり、したがって、彼女からそれを引き離すことなどいかなる意味でも不可能であった。主人公のマデリンが権力に惹かれたのでさえ、家庭を奪われた絶望の反動であり、女性性を裏切ってはいなかった。アダムズは、筋の最初から最後まで、彼女を自分の考える女性性の枠組みの中でとらえる。言い換えれば、事件をめぐる彼女の内面の展開は、彼の信ずる女性性の特質によって初めから決定されていたのである。彼女がたとえ心から権力を欲したにせよ、女性性の特質の一つである弱さが、権力の男性性を許容するはずはなかった。彼女の権力への欲望は悲しみの反動であり、女性性の弱さの裏返しであったが、そんな彼女の権力欲を同じ弱さが今度は否定するのである。

マデリンは、まさしく、アダムズが理解した女性性の雛形であった。

### 3. 『デモクラシー』: マデリンの物語

五年前に夫と子供を相次いで亡くしたマデリン・リーは、幸福だったニューヨークの生活に対する興味も失い、憂鬱に悩まされるようになっていた。彼女は、生活の要だった夫と子供を失い、自分の人生の意味さえも見失ってしまったのである。彼女は、空虚さが生み出す憂鬱から自分を救い出すために、夫と子供に代わる人生の目的を見出さなくてはならない<sup>9)</sup>。

家庭を失うまでのマデリンは、平凡だが幸福な日々で満足して暮らしてき

た。十分な収入。立派な家と馬車。流行を配慮した、洗練された趣味の服装と家具。賢い女性として周囲に一目置かせるような利発さと活発さ。愛する夫と子供。社交界。自分が魅力的だが、ごく平凡な女性であることに喜びを覚えていた。だが、彼女は、家庭を失い女性性の充足を否定された未亡人という特殊な立場に置かれて初めて、自分を取り巻く人間と社会の凡庸さに気づいた。彼女は、安定した生活を一旦手に入れるとそれ以上を望まなくなる凡庸な人間達の集まった社会が、退屈に思えてしよがなくなかった。

心に生じた空白を埋めようとして躍起になっているマデリンは、挑戦的で傲慢な好奇心を隠そうとしない。ヨーロッパにも飽き足らない彼女は、家庭の平凡な幸福の代償として得た自由を、アメリカ社会に対する貪欲な好奇心のために費やそうとする。人間の意志を無残にも退ける絶対的な死によって、信じていた女性の幸福を奪い去られた彼女は、やり場のない反抗心に満ちているのである。彼女は、安楽な生活を営んでいた頃には注意を払うことさえしなかった、自分の存在を超えるわけの分からない大きいものに正面から立ち向かおうとする。彼女の抑え難い反抗心が求めたのは、力であった。死に翻弄される悲しみと屈辱を思い知った彼女が、力に惹きつけられたとしても不思議ではない。彼女は、家庭を失った悲しみが、自分を鉄のように強くしてくれたと信じた。そして、彼女は、力と欲望の渦巻く政治の町ワシントンに目を向ける。アダムズは、彼女に、運命に反抗する強さを与えることによって、ワシントンへの道を開いたのである。

だが、マデリンは、その善し悪しに関わらず、アメリカの生活が提供するはずのものは、総て手に入れ、一滴残らず飲み干すつもりであった。マデリンは、そこにあるものがなんであれ、手に入れること、そこから作り出せるものは何であれ、マデリン自身も作り出して見せることを固く決意していたのである。マデリンは言った。「アメリカが、石油と豚を生み出しているのは知っているのよ。両方とも、蒸気船に乗っているのを見たから、でも、私は、アメリカが、銀と金を生み出すのも聞いて知っているの。どんな女性にも、十分な選択があるということよ。」<sup>10)</sup>

マデリンを政治の世界へと導いたのが力への欲望であるならば、必然的に、彼女は運命だけではなく、女性を家庭に閉じ込める社会にも挑戦しようとしたことになる。だが、彼女には、社会にも、社会が規定する女性の役割にも反対するつもりはなかったのであった。反抗心で大胆になっていた彼女は、自分の行動がいかなる結果をもたらすことになるのか少しも考えてみようとはしなかった。また、考えようにも、社会の規定する女性性に今まで何の疑問も抱かず満足して生きてきた彼女は、社会的存在として女性に許される行為の限界を認識していないのである。彼女は、衝動的な反抗心と甘い自己認識とに動かされて、結果として社会を敵に回すような無謀な挑戦を試みてしまったのであった。

だが、女性の領域を家庭に限定することの合理性と妥当性を信ずるアダムズは、たとえ意図したものでないにせよ、彼女の越権行為を許すわけにはいかない。彼は、女性の領分である家庭から離れようとした彼女に、彼女が接近した男性的な政治権力を通して、女性の限界を思い知らせていくのである<sup>11)</sup>。

マデリンがワシントンに移って最初に行う部屋の模様替えは、彼女の将来を暗示するエピソードとして興味深い。彼女は、引越早々、ラファイエット広場に借りた家の、あまりの趣味の悪さに驚きあきれ、二日間を徹底した模様替えに費やすのである。ワシントンの低級な趣味に立ち向かう彼女は毅然として勇ましい。その姿を描写するアダムズの文体は、皮肉なユーモアにあふれている。彼女の英雄を思わせるような指揮の下、ワシントンの文化は、ニューヨーク社交界を代表する彼女の洗練された趣味に敗北した。だが、ワシントンの真髄は文化ではない。彼女が勝利を収めたのは、前哨戦にすぎない。アダムズは、彼女のささやかな勝利を冒頭に示すことによって、その力の及ぶ限界をはっきりと示しているのである。

このひどい争いにおいて、運命を宣告された家の内部は、悪魔でもいるかのように、引っ掻き回された。椅子や、鏡、絨毯で、手を加えられなかったものはない。その最もひどい混乱の中心に、新しい女主人が、目

の前の広場に立っているアンドリュー・ジャクソン像のように、落ち着いて座り、英雄がかつて示したような決断力で命令を発していた。二日目も終わりに近づくと、勝利がマデリンの額を飾った。新しい時代が、義務と存在のより高貴な観念が、異教徒が住む未開の住処の上にもたらされたのである<sup>12)</sup>。

マデリンは、家が満足いくように整うと、早速、政治の観察に乗り出す。ワシントンでの最初の勝利に気をよくした彼女の行動は、ますます大胆になり、彼女は、ヴァージニア出身の遠縁の弁護士カリントンに、イリノイの上院議員ラトクリフへの紹介を依頼する。彼女の興味を引いたラトクリフは、ピオニアの平原の巨人と呼ばれる老獪な政治家であった。優れた雄弁術を駆使し、威厳のある立派な体格をした彼は、いかにも政治家然として周囲の注目を集めていたが、目的を遂げるためには、善悪を問わず策略をめぐらす策士でもあった。彼は、大統領さえ彼の意向を無視できないほどの実力者であった。そんなラトクリフに対して、マデリンはひるむどころか、自分の優越性を信じて疑わないのである。文化的な洗練度と個人的な魅力が成功の鍵を握るニューヨークの社交界しか知らない彼女は、ワシントンで政治家として活躍する男性の洗練はされていないかもしれないが強力で冷厳な力を過小評価しすぎている。

最初に主導権を握ったのは、確かにマデリンであった。彼女の華やかさの前では、さすがのラトクリフも自分の粗野加減を恥じずにはいられない。そして、彼女は、そんな彼を思いきりおだて上げる。屈辱から救われた彼が感謝して自分に心を許すであろうことを見越した彼女得意の社交術であった。アダムズも、無教養で不作法な西部出身の政治家のカリカチュアとして、マデリンの大袈裟な世辞をそのまま受け取ってしまうラトクリフの愚かしさを情け容赦なく強調する。

だが、やがて、社交術に慣れていない彼が、彼女の行動を自分に対する好意と理解したとき、立場は逆転し、マデリンはラトクリフの力の脅威に晒されることになるのである。アダムズは、マデリンがラトクリフの力に少しず



つ屈していく様を、理想主義に対する彼女の迷いの深まりを通して描いていく。政治倫理など歯牙にもかけない卑劣漢のラトクリフは、本来、マデリンの道徳的な政治観とは全く相容れないはずであった。ところが、彼女とラトクリフの関係が深まっていくのを気遣っている周囲の人間には明白な彼の卑劣さを、慧眼なはずの彼女だけが理解することができない。彼女は、政治はきれい事では済まされない、目的さえ正しければ手段を問うている余裕は残念なならないのだという彼の力の論理に、自ら進んで取り込まれていくのである。

その彼女の行動を支えているのが、彼女の混乱した女性性なのであった。それはまだ無意識の野心である。アダムズは、最後の最も効果的な瞬間まで、彼女に自分の心の奥に潜む野心を悟らせようとはしないからである。そして、第三者によって知らされない限り、彼女は自分ではそれを悟ることができない。彼女が与えられた女性性の顕著な特徴の一つは、理性の弱さであった。彼女の理性は、自己を直視し、冷静に分析する強さを決して持たないのである。彼女の行動を支配するのは、理性に基づく判断力ではなく、むしろ感情であった。彼女の感情は、彼女の理性が女性性にふさわしくない冷厳な事実を認識しようとするすかさず、判断力を失わせる暗幕を張り、感傷の中に彼女を溺れさせるのである。道徳による判断力さえ失った彼女は、心の奥底に潜む野心に無意識に引きずられていく。彼女自身がそれを知覚できない以上、彼女が自分でそれを止めることは、もはやできないのである。

アダムズが、十九世紀後半のアメリカ社会で常識として通用していた、女性の能力に関する偏見を信じていたことは確かである。アダムズ達にとって、女性は、貧弱な理性とそれを補う豊かな感情を先天的に与えられた非理性的な存在であった。この頃の男性達は女性の賢さをよく誉め称えたが、彼らがそんなときに脳裏に浮かべていたのは、彼女達の理性ではなかった。彼らは、直感的に真実を把握する繊細で鋭敏な感覚を女性の賢さとして認めていたのである。アダムズがマデリンに与えた賢さも、この直感力であった。女性の直感力は、男性の現実的で実際的な論理とは結びつかない。マデリン

は、自分が感覚でとらえたものを論理的な言葉に直すことさえできないのである。彼女の感覚的な印象に、理性的な解釈と判断を与えてくれるのは常に周囲の男性であった。

マデリンは、権力欲に引っ張られ、彼女を守ってくれるはずの持ち前の鋭敏な感覚さえ鈍らせてしまっていたのだ。今や彼女には、身近な男性の忠告を冷静に聞く余裕もない。そして、さらに、男性からの称賛がなければ自分の価値を信じるできない女性存在の不安と弱さが彼女の迷いに拍車をかけたのである。女性は自分の判断を信じるできないために、力と自信に満ちた男性からの称賛と肯定を常に必要としていた。彼らの言葉によって、女性は自己の意味を再確認し、快い自己陶醉に浸ることができた。

アダムズは、女性の特質として、彼女達の弱さを積極的に評価したのである。女性の領分を家庭に限定する彼にとって、女性は家庭人としての義務を果たすための強さを是非とも持たなくてはならない。だがその一方で、彼女達の弱さは、女性の魅力として、男性が最も強い愛着を感じる特質であった。彼らは、女性の弱さを自分が支えていると感じることで自己の力を確認し、快い優越感を味わうこともできたのである。女性が彼らの称賛を自己の存在を確認するための拠り所としているように、男性にとっては、男性の存在を常に必要とする女性の弱さが、自己確認に大いに役立っていた。アダムズは、十九世紀アメリカ社会を生き抜いた男性の一人として、女性の弱さを当然のこととして受け入れ、そしてそれを自分自身のために愛した。同じ頃イギリスのJ. S. ミルが著した「女性の服従」の議論は、彼にとって全く受け入れられないものであったろう。ミルは、その論文の中で、理性を含む女性の能力が先天的に男性に劣っているという社会認識が、いかに根拠のないものであるかということ論証し、男女の社会的平等を説いたのであった。

したがって、マデリンにとって、彼女の女性性に対してラトクリフが払ってくれる注意と尊敬は、彼女の身に及ぶであろうすべての危険を忘れさせるほどに快いものであった。たとえ、それが彼の冷徹な計算と意志によるものでも、女性として尊敬される限り、彼女には問題にならない<sup>13)</sup>。彼女は、家庭

に限定される女性であるがゆえの苦しみを味わったにもかかわらず、女性に満足し、女性であることを誇りに思っているのである。彼の自尊心をおだて上げることによって、彼の歓心と信頼を得た彼女であったのに、今や完全に立場が逆転したのだった。

そして、ラトクリフは、女性性の快楽に浸ろうとするマデリンの感情を巧みに操り、結婚を申し込む。彼は、最良の活躍の場であり自己表現の場であった家庭を失って苦しんでいた女性性に、再びその場を提供しようと申し出るのである。抜け目のない彼は、誇り高く誠実な彼女にとって、再婚の妨げとなるのは、自分の無教養と低俗さ、そして、彼女の失った家族への忠誠心と愛情であることを見抜いていた。彼は、そこで、将来必ず大統領夫人にしてみせるという約束で彼女のプライドを満足させ、社会に対する彼女の義務を説くことによって彼女の家族への忠誠心をなだめようとする。いずれは大統領になる自分の妻となることは、社会のために自己を犠牲にすることであり、彼女の徳によりふさわしい行為であるというのが彼の試みた説得であった。それは、大義名分を与えて虚栄心と虚無感を満足させる実に効果的な説得であったといえる。

だが、女性であるがゆえの感情に揺さぶられ続ける彼女には、結婚を正当化するための言い訳がさらに必要であった。マデリンは、結婚を承諾するために、メロドラマ的な自己犠牲の役を演じる。ちょうどその頃、彼女は、妹のシビルがカリントンを愛していることを知った。しかし、彼はマデリンに思いを寄せている。彼女は、自分に対する彼の思いを断ち切り、妹に注意を向けさせるためには、ラトクリフとの結婚が最良の手段だと思いこもうとしたのである。彼女はシビルにラトクリフと結婚する意志があることを告げた。

それは、彼女の欲望を隠蔽する自己欺瞞が完成した瞬間であった。そして、その瞬間を、アダムズは、彼女の心の真実を彼女自身に明らかにし、絶望のどん底に突き落とすために待ち望んでいたのであった。アダムズは、シビルを介して、ラトクリフがある法案を通す代償として巨額の賄賂を受け取って

いた事実を彼女に突きつけた。その結果、彼女は、啓示を受けたかのように、たちどころに今までの自分の心の欺瞞を理解するのである。彼女は自己の野心を正当化し、自分の弱さを甘やかすために、自己犠牲という女性的美德の陰に隠れたのだということに気付いた。彼女を襲うのは、アダムズの目的であった、深い絶望である。

「ああ、人生って、なんて嫌なものなんだろう。」とマデリンは、両腕を振り上げ、抑えようのない怒りと絶望を表す身振りをしながら、叫んだ。

「ああ、死ねたらいいのに。世界なんて滅んでしまえばいいのに。」マデリンは、狂ったように泣きながら、シビルの傍らに身を投げ出した<sup>14)</sup>。

マデリンの悲劇は、彼女が、既存の女性性の枠を超えることができないにもかかわらず、人生の目的を家庭の外に見出さずにいられなかったところから始まった。それはまさにアダムズが作り出した悲劇である。彼は彼女に女性を超えるきっかけを与えておきながら、女性性の中に彼女を封じ込め、自分の望む結末を故意に引き出したのである。だが、それは、さらにいえば、彼女に備わった自我が作り出した悲劇でもあった。彼女の自我は、アダムズの指示を待つまでもなく、無意識のうちに女性性に規定されない根源的な生の欲求に身を任せていたのである。

彼女はもともと自我の強い人間であり、自己実現のために全力を傾ける人間であった。彼女が従来家庭を中心とする既存の女性の世界に何の疑問も抱かずに満足していたのは、お仕着せの価値観をそのまま受け入れ、そこが自分の存在すべき場所なのだと思っていたからである。夫と子供を失うまでは、家庭こそ、彼女にとって自己実現の場であった。ところが、彼女は、彼らの死によって自己の存在理由を見失う。自我の危機である。彼女の自我が強ければ強いほど、新たなる自己実現の場を見出そうとする欲求は強い。彼女の誇り高い自我が、味わわされた苦悩と失望を補って余りある、大きな世界を次なる自己実現の場として求めたのは、ごく自然なことだった。彼女の自我は、女性としての失望を味わうことによって、性差を超えたのである。

ところが、彼女の性差を超えた人間的な自我に対して、社会的な教育に

よって教え込まれた女性性が邪魔をするのである。彼女の自我が求めた力は、十九世紀のアメリカ社会において、男性に属するものであった。彼女のラトクリフに対する評価の混乱は、彼女自身の根源的な生の欲求と社会的な教育が彼女に着せた女性性が、めまぐるしい陣取り合戦を彼女の中で戦っていたために生じたのだとも言える。自己のアイデンティティを守るために戦いの勝敗を決めるよう迫られた彼女は、何とか両者の共生の道を探そうとする。彼女は、まず、自我が求める政治権力に近づくために道徳心を犠牲にした。そして、次に、その妥協によって傷ついた女性性を満足させるために、美しい自己犠牲で彼女の行為を覆い隠そうとする。女性性を保ちつつ自我を満たそうと無意識になした、彼女の必死の試みであった。それは、第三者の冷静で客観的な視点には到底耐えられない欺瞞に満ちた危ういバランスである。彼女の心は、自己の欺瞞に気づかない振りをすることによって難局を切り抜けたのである。

しかし、アダムズは、このバランスを真実の突然の提示によって壊す。自分の女性性に疑いを抱いたことさえなかった彼女は自己否定にさえつながら大きな衝撃を受けた。このショックで、彼女の自我は、彼女の心の奥底に今までの跡形もなく引っ込んでしまう。そして、女性性に完全に支配された彼女には、激しい嫌悪感と焦燥感だけが残る。彼が彼自身のために彼女に体験して欲しかったのは、この衝撃であった。感情のうねりが激しければ激しいほど、自分をこのような泥沼へと引き込んだ政治権力への彼女の絶望は深まり、読者の受ける印象も強いのである。確かに、彼女が実際に絶望したのは自分自身に対してであり、政治は、彼女が自分の内面を知る契機となつたにすぎない。だが、論理的な分析のできない彼女の理不尽な感情は、激しい後悔に身もだえしながら、政治を徹底的に嫌悪することによって、自分の傷を癒そうとする。読者はそんな彼女の姿に同情し、彼女と一緒に、ラトクリフに対する怒りと政治に対する嫌悪を募らせるはずであった。そして、それがアダムズ自身のカタルシスにもなったのである。

彼女が自分の欺瞞を理解したのはほんの一瞬であった。彼女の理性が明晰

な論理に耐える力を持たないからである。自分の政治観を知らながら今まで批判しなかったのに、なぜ今になって責めるのかと問いだすラトクリフに、すでに女性性の鎧をまどってしまったマデリンは、一度は悟った自分の心の欺瞞を認めることができない。彼女は、自分の感情に固執することで、彼の論理を退ける。

「だからこの問題については、お話したくありません。あなたが、議論で私を打ち負かすのは間違いありませんもの。多分、私にとっては、理性ではなく感情の問題なんですわ。でも、私が政治に向いていないというのは、明らかにすぎるくらいの真実なんです。私は、あなたの足手まどいになりますわ。私の弱さは私自身が一番よくわかっているんです。もうこれ以上私を苦しめないでください。」<sup>15)</sup>

ラトクリフが去り、すべてが終わった後、マデリンは、ワシントンを離れ、永遠の平安を呈しているエジプトに行きたいと願う。心に激しい混乱を巻き起こしたワシントンの経験の後に残ったのは、嵐が過ぎ去った後の疲労を癒すため、どこか遠く離れた平穏な場所へ行きたいと願う一人の女性であった。最後に、アダムズは、彼女の苦悩の真の解決は女性としての幸福しかないということを示すかのように、彼女に家庭を再び与えようとする。彼は、自分の都合で深く傷つけてしまった彼女の心を慰め、彼女にもう一度女性の幸せを味わわせたかった。彼は、シビルに、彼女への求愛を再び試みるようにとカリントンに勧めさせるのである。マデリンに女性性を再教育しようとするアダムズの試みは、カリントンと共にマデリンが再出発することによって、終結するのである。

#### 4. おわりに

アダムズのマデリンは、あくまで「女性」であった。だが、並外れて強い生の欲求を持った彼女は、潜在的には、社会の規定する女性性にとらわれない一人の独立した人間として、自由を確立する力を持った人間であった。彼女にとって、家庭を奪われたことは、脱皮のための大きな機会だったのであ

る。だが、彼女は、最後まで女性性に固執し、新たなる飛躍を遂げることはできなかった。

マデリンの設定は、最初からアダムズの信念に反するものであった。そもそも、彼は、女性の強さを、女性の領分である家庭を守るためだけにしか求めてはいないのである。彼は、道を踏み外した彼女を、やがては女性の領分に引き戻さなくてはならない。それができなければ、彼女を破滅させるしかなかったであろう。彼は、真実を告げる啓示という、直感的な女性に最もふさわしく効果の大きい方法で、彼女の女性性を救ったのだった。

マデリンの葛藤は、今まで疑うことなく信じて来た女性性と、その女性性を超える自己実現との葛藤であった。アダムズの操作によって、彼女の女性性が最後には優位を占め、彼女が「女性」であり続けることを選択することによって、今回の決着はついた。だが、彼女の女性性は、決定的な勝利を収めたわけではない。彼女の意志と生に対する欲求は、やがてまた、人生の充足を求めるだろう。

そして、彼女が直面しなければならないのは、同じ二者択一である。社会が容認する以上に女性の領分を超えようとすれば、彼女は再び葛藤を繰り返さなくてはならない。また、社会の規定する女性性に固執し続けるのなら、彼女は、心の空白に耐えて、社会の規定する女性の領分に留まらなければならない。結局は、彼女がアダムズの被創造物である限り、再婚に頑なな拒否を示す彼女の心がカリントンとの結婚を受け入れ、女性性を満足させなければ、彼女は生の充足を得ることはできないのである。

サミュエルズは、アダムズが最後にほのめかすマデリンとカリントンの結婚は、幸福な結末を望む読者に対する、実現性の無い、単なる気休めにすぎない主張する<sup>16)</sup>。だが、アダムズは、彼女の葛藤の厳しさを知った上で、彼との結婚を勧めた。彼が考える女性の幸福は、家庭にしかなかった。彼女の苦悩をカリントンとの新たな家庭は次第に癒してくれるだろう。マデリンは、最初から家庭に戻るべく定められていたのであった。

## 注

- 1) 講演「女性の原始的権利」に続き、アダムズは、今度は小説という形式で女性を考察しようとした。自分と対照的な性に対する彼の興味は、彼の死に至るまで一貫して続き、彼はそれを次々と著作にしていくな。彼の著作に表せる女性観の連鎖的なつながりについては、米山美穂「ヘンリー・アダムズと女性：『女性の原始的権利』にみるアダムズの女性観」『東京女子大学紀要論集』第45巻2号(1995)を参照のこと。
- 2) 誰の目にも明らかだったのは、悪徳政治家ラトクリフと James G. Blaine との類似である。Blaine はアダムズの父が党から大統領候補に指名されるのを過去に二度妨げている上に、アダムズ自身が仲間とともに積極的に推進していた官吏任用制度改革に興味を持つ振りしながら、結局は裏切ったりして、個人的にもアダムズの反感を買っていた。Ernest Samuels, *Henry Adams: The Middle Years* (Cambridge: Belknap P of Harvard UP, 1958) 89
- 3) アダムズが『デモクラシー』を匿名で出版することに固執したのも、実在の人物をモデルに使ったからだった。少なくとも、アダムズはそう主張した。だが、この小説が、歴史家アダムズの最初の試みであることを考えれば、慎重な彼が、自分の名を傷つけるあからさまな失敗を恐れたということも十分に推測できる。小説は、ハーヴァードを卒業してヨーロッパに遊学していた頃からの、彼の野心の一つだった。彼が好んで読んだジョージ・エリオットや、ディズレイリ的小説が、彼の野心を掻き立てていた。だが、彼は、優れた政治家こそ輩出したが、芸術家は一人として生まれていない彼家の一員として、自分の才能に自信が持てない。『デモクラシー』は、四十才を過ぎて、本業の歴史家として成功しつつあったからこそ、やっと試みることのできる実験でもあった。ほぼ二十年ごしに成就する野心に、期待より不安がまさってもおかしくはない。だが、彼の心配にもかかわらず、『デモクラシー』は、ヨーロッパでも順調に出版部数を伸ばす。作者に関しては、種々の憶測が飛び交った。アダムズ夫人のマリアン、アダムズの親友クラレンス・キングなど、彼の周囲の人々が次々と作者として取り沙汰されたが、彼自身をその候補に挙げたものは、ほとんどいなかった。初めての小説の評判に気を良くした彼は、自分が作者であることをごく親しい者にだけ知らせただけで、後は、ゲームを見るように成り行きを楽しんでいた。結局、アダムズの死後、1925年版のはしがきで、許可を得た出版人が事情を明らかにするまで、彼が『デモクラシー』の作者であることは、公表されなかったのである。
- 4) 『デモクラシー』を著したアダムズの政治的な意図に関しては、種々の解釈がある。ブラックマーは、アダムズが政敵のブレインをラトクリフとして描くことによって、彼に道徳的な制裁を加え、彼の政治的な立場に間接的な打撃を与えようとしたと主張する。R. P. Blackmur, "The Novels of Henry Adams" *Sewanee Review* 51 (1943): 285. ライアンは、アダムズが単にデモクラシーの墮落性を明らかにしようとしたのではなく、アメリカの政府が諸外国の政府より優れているとするような、アメリカの政治の特異性を強調する認識の虚偽を示したのであるとする。さらに、ライアンは、アダムズがイリノイ出身のラトクリフに西部の人間のもたらす悪影響を象徴させ、それに対抗する措置として、マリアンの救済者となるカリントンに南部を代表させることにより、西部に対する



- 北部と南部の結合の必要性を説いたと主張する。Melvin Lyon, *Symbol and Idea in Henry Adams* (Lincoln: U of Nebraska P, 1970): 25-26.
- 5) 『デモクラシー』は、アダムズの「ベールで覆われた自伝」(“veiled autobiography”)であった。Samuels 75. 彼は、ワシントンの自宅で、気の置けない友人達と作ったサークルを中心に、政治や文化に関する討論を活発に行っていた。『デモクラシー』に、彼は、彼らの生活と意見を忠実に描いた。『デモクラシー』は、彼にとって、自分が現実に生活し観察している社会の誠実な縮小図であった。そして、その小さな社会のホステスとして中心的な役割を果たしていたのが、妻のマリアンであった。彼にとって、『デモクラシー』の中で女性が重要な登場人物となることは、必然であった。
  - 6) ジレットは、アダムズが女性を主人公に選んだ意図として、女性の風刺小説への適性を指摘する。Jane Brown Gillette, *Medusa/Muse: Women as Images of Chaos and Order in the Writings of Henry Adams and Henry James*, diss., Yale U, 1972 (Ann Arbor: UMI, 1973, 7314242) 68.
  - 7) 十九世紀アメリカ社会において、女性が生まれながらにして備えているとされた資質。米山「ヘンリー・アダムズと女性」150-52を参照のこと。
  - 8) 米山「ヘンリー・アダムズと女性」138-142を参照のこと。
  - 9) マデリンは、憂鬱を紛らわすために流行の哲学と慈善事業に取り組んでみるが、飽きたらずに放棄してしまう。ヴァンダシーは、マデリンの文化への絶望的な取り組みと放棄に、アダムズのアメリカ社会に対する批判を見る。十九世紀社会における、男女を問わない様な、文化と教育に対する熱狂的な志向は、アダムズにとって、非凡な個人を排除し、協議的な中庸を尊重するアメリカ社会の悪弊を表していた。アダムズは、同様の意見を1875年8月31日付けの友人のカンリフ卿宛の手紙の中で述べている。これは、彼が、マデリンに対し自己の思想を投影したことを示す一例でもある。Charles Vandersee, “Pursuit of Culture in Adams’ Democracy” *American Quarterly* 19 (1967): 247. また、ジレットは、マデリンの憂鬱の原因に “the feelings of uselessness and inner emptiness of a liberated upper-class woman” を見出そうとする。Gillette 70. だが、アダムズの意図の中には、ジレットが主張する、自由になった十九世紀上流社会女性が悩まされた無気力感は含まれていないと考えられる。マデリンは、家庭に満足し、それ以上のものは何も望んでいなかった。アダムズは、女性に家庭以上のものが必要だとは考えていなかったのである。
  - 10) Henry Adams, *Democracy: An American Novel, Novels, Mont Saint Michel, The Education*, ed. Ernest Samuels and Jane N. Samuels (New York: Literary Classics of the United States, 1983) 5.
  - 11) サミュエルズは、アダムズによるマデリンの教育を、嘆かわしく堪え難いデモクラシーの現実を目の当たりにするという政治的な体験を中心に捉えているが、筆者が強調したいのは、マデリンに情け容赦なく女性としての自己を直視させようとするアダムズの意図である。Samuels 70.
  - 12) Adams 9.
  - 13) ジレットは、マデリンが、ラトクリフの精力に性的に惹かれていたと指摘する。Gillette 72. 確かに、マデリンがアダムズの与えた使命に忠実でなければ、ジレットが主張するように、新奇なものに焦がれていた彼女が、ラトクリフの社交界擦れしていない粗削りな力強さに惹かれたとしても不思議はないである

う。だが、アダムズにとっては、西部出身者に特徴的なラトクリフの粗野さこそ、嫌悪の対象だった。マデリンはアダムズの意志を反映しなければならないのである。彼女がラトクリフの粗野さに惹かれるはずはなかった。

- 14) Adams 166.
- 15) Adams 177.
- 16) Samuels 84.